

農場は北海道炭鉱汽船と小林、佐倉農場が主で、森林が豊富な緑丘は林業に従事する者が多かった。

鮭の木彫で全国的に知られた本田数馬翁も北炭の山林地小作人として入植し、この独創的な芸術品を生み出したのである。



本田 数馬翁

◆北学田

札幌農学校（後に北海道大学）は、明治二十三年（一八九〇）雨煙別学田地を設定し、第五農場と称した。

後の字名改正で北学田となった。

明治二十七年（一八九四）農場看守所を設置し監督を置いた。

明治二十八年（一八九五）に最初の入植があり開墾が始まった。

この地に入植希望者が多かったのは、大学による病害虫予防・駆除・肥料・輪作・選種・堆肥の必要性など農業の指導が行届いたことなどにあった。

又、大正五年（一九一六）、農協の前身たる栗山町で最初の北学田産業組合が設立された。

◆本沢

栗山東部の山林地帯にあつて、ポンウエンベツ川の本流の水源地であつた。

明治三十年代に開拓しながら炭焼きや木材の伐採、山出しなどを行っていた。

多くは王子製紙（株）の所有地であつたが、平成六年（一九九四）、栗山ダムが完成し、人家は無くなった。

◆桜山

旧名は杵臼であつた。坊主山の中段に桜の木が多かつたこと、神社の境内に三千本の桜を植えた事などから桜山となった。杵臼官林地や共有地などがこの地に有つたが入植地に貸下げられていた。

大正十四年（一九二五）、水田のための溜池づくりを企画し昭和二年（一九二七）に完成し水田造成が急増した。

◆杵臼

草創の頃は旭台と呼ばれていた。

角田に近いので石橋、小島、本多農場等有力者の所有地が多かつた。

これらの農場主はことごとく土地を解放し小作者達に喜ばれ、角田村に感動をもたらした。

大正末期から昭和初期にかけて、政治研究会を主宰し、日本農民組合を結成した荒岡庄太郎は杵臼出身である。

◆旭台

角田から見て東方にあり、朝日の昇る

丘として名付けられた。

アノロ川とトキト川の間地帯であり、角田に近く、早くから肥沃な水田造成地であり、有力者の農場として着目され売買の移動も多かった。又この地域には角田村有地も区画され、材費投入されたので小作人が受けた恩恵は大きかつた。

◆共和

旧字名は旭台、七戸、アノロとあり通称十三戸といわれていた地域があつた。その七戸と十三戸が合併し共和となった。

この地は角田に近接しているもので、最も古い開墾地で当時の重要地点であつた。

昭和四十年（一九六五）に建設された、高速堆肥生産工場は、し尿・塵芥を処理し堆肥として農家に供給して生産性を高め、環境衛生にも寄与するところの多い全道初の施設であつた。

◆三日月

昭和十年（一九三五）の地番改正で三日月となつたが以前はアノロであつた。

蛇行した夕張川の跡が三日月のような沼になつていた事からこの名がついた。角田と同じ様に早くから入地者があり、西へ東へと開拓されていった。

◆大井分

旧字名は栗山町内で一番多くの字名が入り乱れていた。

当地からいづれの方面にも行く事ができる別れ道の意で、室蘭線の追分と混同しないようこの地名にした。

夕張に向う交通の要所として栄え、最初の角田神社が建設されたのも大井分であつた。又栗山町の墓地が高台で展望のよい時登山に設置されている。

◆南学田

北学田と同様に現北海道大学の農場として設置され、アノロ学田農場又は第六農場と呼ばれていた。

旧字名は阿野呂学田でほぼ平坦地である。明治二十八年（一八九五）から入植が始まり、看守所も設置され本格的な開墾が始まった。

現在の継立市街地は南学田であつたので、岩見沢市からの夕張道路の終点は継立（南学田）であつた。

大正十五年（一九二六）夕鉄の継立駅ができ南部の交通の要衝となり継立駅付近の新市街地はアノロ川を境として南学田から分離した。

◆御園

御園とは帝室を意味し、旧字名は継立、アノロ、タラツ、二岐と広範囲にまたがっている。

以前は築別御料地のうちにあつて大部分は森林である。

明治三十一年（一八九八）から農業適地が開放され、その年に十一戸の小作人が入地し、御料局札幌支庁の出張所が実地経営に当り保護移民の形式をとつた。

大正十三年（一九二四）には不要御料地に設定されて、十五年間借地者に払下げの処置がとられ、入植者は歓声を上げた。

◆南角田

旧字名は築別、多良津、継立となつていて、通称タラツ御料と呼ばれていた。御園と同様に明治三十一年（一八九八）農耕適地解放により開拓がはじまり大正十四年（一九二五）から払い下げをはじめた。

この地の殆どは畑作であつたが、昭和三十七年（一九六二）、大夕張総合開発事業の栗山幹線水路が通るようになり、稲作の農業構造改善地区として指定を受けこの周囲は造田され、稲作が進んだ。

◆円山

旧字名は築別、イタイベツといい築別御料地に属していた。

貸下げをはじめた御料地に明治三十年（一八九七）に最初の入地があつた。入植した人達は夏は農業、冬は林業労働者として御料地で働く兼業農業が多かつた。又昭和二十年（一九四五）、焼土と化した東京より疎開者集団三十六世帯が、東山地区に入植して不慣れな農業にもかかわらず果樹、園芸など採入れるなど、適地適産主義で着実な歩みを続け、東山メロン、長芋などの生産地として名高い。

◆滝下

栗山町の最南端にあり由仁町と夕張市と相對している。

旧字名は川端・イタイベツと呼んだ。

夕張市との境界となるソーポコマツ川の上流に千鳥が滝があり、その下流にあることから滝ノ下と名付けたという。

明治末年頃から御料林を伐採し、平坦部では農地開拓にクワを振ったが沢が多く林業が主であつた。

◆日出

栗山町の東部にあるため日出と呼ばれた。明治二十四年（一八九一）頃夕張で働く同志八人が入植したのが最初といわれていた。当時は登川村に属していた明治三十年（一八九七）に角田村に編入された。石狩や空知から夕張炭田に向う通り道でこの地にも炭鉱ができ住民も増え、夕張からの鉄道や地元の鉄道が敷設されていた時もあった。

又良好な野菜の産地であり、夕張の台所として発展した。特にメロンは夕張メロン以前に日出メロンとして評価が高く、ビニールハウスを導入するなど道内の先駆的役割を果たした。

※栗山、角田、継立の各市街地については住民や企業、店舗等の出入りが激しく現在も日々変動するので割愛した。参考文献は栗山町史、各部落史、郷土史等である。

栗山町開拓記念館 研究員 出南 紘
栗山町教育委員会 発行